

巻頭言

イノベーションに思うこと

Thoughts on innovation

執行役員
研究本部長
(兼) 技術イノベーションセンター所長



江嶋 闢夫
Kikuo Ejima

昨今、通信事業者間の激しい競争、そこに提供するハード、ソフト、アプリメーカの熾烈な戦い、スマートコミュニティ・スマートハウスなど情報通信関連のものが雑誌、展示会を賑わしておりイノベーションという言葉がよく聞かれる。

一方、コマツの扱う製品は経験工学の部分が大いと言われ、一昔前まではイノベーションという言葉と結び付けて考えることは少なかったのではないだろうか。

しかし、今、この世界でもKOMTRAX, AHSなど情報通信技術によるビジネスモデルを変えるイノベーションが起こっている。

イノベーションには従来製品の改良を進める持続的イノベーションと全く新しい価値を創造する破壊的イノベーションがあると言う。KOMTRAX, AHSはある意味破壊的イノベーションとも言える。

“知の実用化タイムロスと失敗”という言葉がある。破壊的イノベーションを起こす可能性のあるアイデアは当初不確実性が高く、その時点で組織内に価値を評価できる能力が足りない。時間が経過し、不確実性が低くなり、評価能力と一致する頃にやおら実行に移す。しかし、長い時間のロスを生むことになり結果他に先を許す事になる。(図1) このタイムロスを無くすには不確実性を早期に小さくすることであり、そのためにはアイデア段階でも

① “とにかくやってみよう!” (learning-by-implementation)

② “早めに市場に出してみよう、聞いてみよう!” (learning-by-exposure)

と言われている。特に情報通信技術による建機・産機ビジネスモデル変革は上記のことが大事なのではないか。やってみないと分かりませんでは叱られそうだが、試して分かることも多い、他に一歩先んずるには必要なことだ。

一方、破壊的イノベーションの対局として否定的に捉えられがちな持続的イノベーションもメーカーとして非常に大事である。一つの技術を継続・追求することにより大幅なコスト低減、性能・耐久性向上を達成し長い目で見ればイノベーションといえる状態を作り出せるし、時として思いもよらないものが出てくることも過去経験している。

継続は力である。

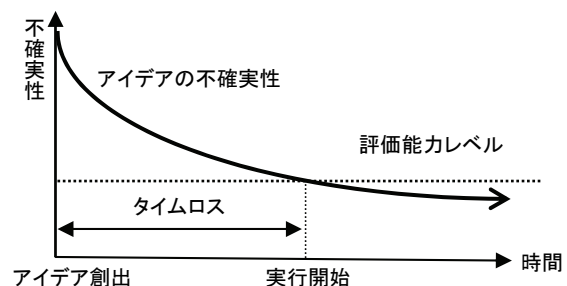


図1 知の実用化タイムロス